

### (1)満洲事変後の状況と丸山眞男

丸山眞男が第一高等学校（略称「一高」）に入学した1931（昭和6）年頃、丸山が寄宿した同校の寮では左翼運動が全盛を迎えていた。寮内にはマルクス主義の支持者だけでなく日本共産党の「細胞」（下部組織）も存在しており、しばしば摘発の対象ともなった。学生の中にはこのような左翼運動をよく思わない者も多く、右翼と左翼に鋭く分岐していた。丸山はそのどちらにも属していなかったが、トイレに書かれた「天皇制打倒」の落書きには嫌悪感を覚えたと述懐している。

寮内の雰囲気とは裏腹に実社会では右翼が台頭しつつあった。1931年の暮れ、政治家の鶴見祐輔（つるみゆうすけ）の屋敷で開かれた「火曜会」という会合に赴いた丸山は、当時公にされていなかった10月事件の概要を評論家の沢田謙（さわだけん）から聞いている。沢田は当時の政党政治に批判的で、ファシズム運動に同情的な期待を寄せていた。これに反論したのが政治学者で東京帝国大学法学部教授の蠟山政道（ろうやままさみち）である。丸山はその場面をややパステイックに回想している（画像：蠟山政道〈『追想の蠟山政道』蠟山政道追想集刊行会、1982年〉）。



開口一番にとび出したのは「わが火曜会からもファッショが出たということは私の衷心より遺憾とするところであります」という言葉であった。先生が立上がった唐突さと、これまでの「講師」の座談的な話しぶりとは対蹠的な演説口調の切出しが、先生の言葉をこのように鮮明に私の記憶に刻みつけたのである。そうして先生は、日本はあくまで議会政治の途を歩むべきであり、また国際的孤立を避けて、国際連盟の一員として紛争の平和的解決に努力しなければならない、という論旨を、ほとんど一気に述べ立てたあと、所用のためということで退席された。（「或る邂逅」1982年〈『丸山眞男集』第12巻〉）

丸山は蠟山の生硬な語り口に、気心知れた「火曜会」のメンバーである沢田に対して苦言を呈することへの演技めいた自己韜晦を感じるとともに、それでも覆い隠せない「本心の吐露」——議会制民主主義の発展と国際平和の諸条件の追究——をみている。

一高の寮ではトイレに「帝国主義戦争絶対反対」という落書きがなされるなど、戦争と社会の軍事化に反対する動きは強かった。

そんな学生たちによる運動の一端が、1933（昭和8）年の瀧川事件（京大事件）である。この事件は、刑法学者で京都帝国大学法学部教授の瀧川幸辰が講演会で紹介した学説が問題視され、「赤化教授」のレッテルを貼られたことが発端になったものである。瀧川の著書から「赤」（マルクス主義的）とされる記述が抜き出され、右翼的な国会議員や民間団体は、瀧川を含む「赤化」した教員を各大学から排除するよう強請した。そして文部大臣の鳩山一郎は、京大総長と京大法学部教授会の反対を押し切って瀧川を休職処分としたのである。この学外からの攻撃に立ち上がったのが、京大の学生たちである。左派学生にとどまらない幅広い学

生が瀧川の休職反対運動に参加し、丸山から「ノンポリ」「リベラル」と評された兄の丸山鐵雄はこの運動のリーダーとなった。しかし、京大法学部教授会の職を賭した抵抗も切り崩しに遭い、分断されてしまった。学生運動も大学側の措置によって退潮に追い込まれてしまう。

1934（昭和9）年に丸山が東京帝国大学に入学する頃には、学生の運動熱はすっかり衰えていた。丸山は当時の帝大の雰囲気や次のように述懐している。

たとえば三一番教室で講義をきいていると、左隣の席から机の下をとおってビラがまわってくる、それをちょっとみて、またそっと右隣の学生にまわす、というようなことをきいていたのに、入ってみると、全然そんな経験にあわない。（丸山眞男・古在由重「一哲学徒の苦難の道」1966年〈『丸山眞男座談』第5冊〉）

大学の外では軍国主義化の嵐が吹き荒れ、この年の10月に陸軍省から『国防の本義と其強化の提唱』が刊行されて軍が政治に容喙する姿勢を見せたほか、11月にはクーデタを画策した陸軍将校と士官候補生が検挙される士官学校事件が起こった。